

国立劇場おきなわ「第2回新作組踊戯曲大賞」の入賞作品の決定について

国立劇場おきなわでは、沖縄の伝統芸能の保存振興を図ることを目的として、平成16年の開場以来、組踊、琉球舞踊、琉球音楽等の番組を上演してまいりました。国立劇場おきなわ開場15周年、組踊上演300年となる記念の年にあたる令和元年度から、沖縄伝統芸能の振興を図るため、新たな作品の創造を目指して「新作組踊戯曲」の公募事業をスタートいたしました。

今回は、第2回目で8作品の応募があり、「企画（発想・意図）」、「せりふ表現」、「音曲と歌詞」、「舞台にのせた場合を想定して」の4つの項目を指標に厳正に審査した結果、下記作品の入賞を決定いたしました。

この賞には大賞・奨励賞・佳作の三賞が用意されておりますが、本年度は大賞1、奨励賞1、佳作2の各作品が選出されました。総体的に個性豊かで作者の意欲あふれる作品が多く、いずれも新作組踊戯曲として大きな可能性を秘めた作品でした。入賞を逸した4作品を含めさらに練り上げ練り直しを重ねて、作品の完成度を高めていくことが期待されます。

当劇場ではこれを契機に、伝統の保存継承を踏まえつつ、さらなる沖縄伝統芸能の発展を目指し、この制度の一層の充実を図っていく所存であります。舞台芸術関係各界のご支援ご協賛をよろしくお願いいたします。

記

第2回新作組踊戯曲大賞 鈴木耕太作品「鶴亀の縁～扇のえにし～」

短い作品ながら組踊らしい祝言性をもっている組踊である。そのことは、祝言能的な組踊様式の手本になる可能性を持っている。作者の創作意図にあるように、琉球と薩摩の関係資料を参考にした構成で、シンプルな展開・戯曲構成は非常に組踊的な仕上がりとなっている。また、セリフはわかりやすく、登場人物の人物像もよく描かれており、実演家の立場から実際に唱えやすく、8.8.6の韻を踏んだ詞章も耳に心地好い。課題としては、琉球語の表現をより細やかにし（待遇表現などに留意する）組踊の表現を豊かにするようにつとめ、もっと明解に整理する必要があると思われる。琉球と薩摩、場面設定からそれぞれの雰囲気をもっと活かすことで、見応えのある新作組踊になると思われる。

第2回新作組踊戯曲大賞奨励賞 伊良波賢弥作品「菊花の縁」

尚円王と奥間鍛冶屋の伝説をもとに、組踊としてしっかり構成された戯曲。物語のすじは、少々入り組んでいるが、台本は組踊様式によくまとめられている。安定した琉球語作文能力があり、故事などにも詳しく高い見識が窺われる。音曲は、場面に応じて無難な選曲である。台詞や歌詞も、全体的に良く練られているが、「長せりふ」の部分の多さが気になる。推敲が必要であると考えられる。空手と踊りの程よい押入は、平板になりがちな全体の構成の助けになっている。台詞、音曲との相乗効果で豊かな舞台表現が期待できる作品である。

第2回新作組踊戯曲大賞佳作 西岡敏作品「清ら瘡の御神」

コロナ禍の中で着目した新作組踊のテーマに感染症である天然痘を取りあげ、琉球王朝時代に「種痘」の普及に奮闘する夫と、その最中に一人息子を亡くし発狂する妻、医道と夫婦の心の葛藤を描く素晴らしい着想で、結果の受け止めを観客に委ねる発想もユニークである。構成、展開に組踊の新たな境地が伺える力作である。ところが一面で、台本が長すぎてその素材が十分に生かされておらず、説明的な台詞が多くなっている。構成面でもっと整理し、深掘りすると大きな期待の持てる作品である。

第2回新作組踊戯曲大賞佳作 大城貴幸作品「綾雲」

亡霊の登場や回想シーンを盛り込むなど、新作組踊ならではの手法が取り入れられた意欲的な作品で、夢幻的構成で斬新である。古典曲の名曲を中心に、創作曲の選定など工夫が凝らされ、又、節歌5曲に舞踊が押入されることも物語の展開に演出効果を高めている。一方、台詞が極端に長い箇所が多いのは、一考を要する。表記や表現は多少気になるが、努力の跡がみられる。詞章も無駄な部分を刈り込み整理し、表現を磨けばもっとよくなり、期待の持てる作品である。

[備考]

※受賞作品の作者には、賞状と賞金が贈られます。(大賞20万円、奨励賞10万円、佳作5万円)

[参考]

※審査選考の観点

「企画(発想・意図)」、「せりふ表現」、「音曲と歌詞」、「舞台にのせた場合を想定して」

※「第2回新作組踊戯曲大賞」選考審査委員

眞境名 正憲【重要無形文化財「組踊」保持者(総合認定)、組踊実演家】

波照間 永吉【名桜大学大学院国際文化研究科特任教授、沖縄県立芸術大学名誉教授】

比嘉 康春【沖縄県立芸術大学名誉教授、野村流師範】

富田 めぐみ【琉球芸能大使館代表、演出家】

嘉数 道彦【国立劇場おきなわ芸術監督、組踊実演家】